

O-1-3**滲出型加齢黄斑変性の前房水中補体分解産物の検討**

○加藤 寛¹⁾、大口 泰治¹⁾、大森 智子²⁾、町田 豪²⁾、関根 英治²⁾、石籠 鉄樹¹⁾

¹⁾ 福島県立医科大学眼科学講座、²⁾ 福島県立医科大学免疫学講座

【目的】

遺伝子研究より、加齢黄斑変性の発症には補体の無秩序な活性化が関与することが指摘されている。しかし、補体の活性化によって生じた加齢黄斑変性の眼内液の補体分解産物を測定した報告は少ない。今回、血管新生加齢黄斑変性 (nAMD) の前房水中の補体分解産物 C3a、C4a、C5a を測定したので報告する。

【対象と方法】

対象は治療歴のない nAMD 患者で、抗 VEGF 療法を行った 43 名 43 眼、平均年齢 73.5 歳。白内障手術を行った 25 名 25 眼、平均年齢 70.7 歳を対照とした。前房水は、硝子体注射および手術前に房水ピペット (イナミ社) により採取した。補体分解産物 C3a、C4a、C5a の濃度は Cytometric Bead Array を用いて測定した。

【結果】

C3a、C4a、C5a は nAMD 眼では、それぞれ 19.3 ± 12.8 (平均 \pm 標準偏差) ng/ml、 14.7 ± 8.1 ng/ml、 3.2 ± 2.0 ng/ml で、対照眼では、それぞれ 15.6 ± 8.9 ng/ml ($P=0.204$)、 14.0 ± 6.1 ng/ml ($P=0.725$)、 2.3 ± 2.2 ng/ml ($P=0.103$) であった。いずれの因子も nAMD 眼で高値であったが統計学的有意差はなかった。年齢との相関を検討したところ、nAMD 眼では C4a において ($R^2=0.109$ 、 $P=0.04$)、対照眼では C3a において ($R^2=0.165$ 、 $P=0.04$) 年齢と伴に有意に増加する傾向を認めた。他の因子も年齢と伴に増加する傾向が見られたが統計学的有意には至らなかった。

【結論】

補体分解産物 C3a、C4a、C5a の濃度は、nAMD 眼と高齢者で増加する傾向が見られる。